

ROAD TO 2040
ASHIYA



80th
ASHIYA CITY
ANNIVERSARY
BOOK

芦屋市制施行 80 周年記念



芦屋市の市民参画・協働アドバイザーであり、コミュニティデザイナーとして各地でワークショップなどを実践されてきた山崎亮さんに20年後の芦屋について語っていただきました。

クルマの自動運転技術と地域コミュニティ

これからの20年のうちに、完全自動運転技術が確立するのではないかと思っていて、それが私たちの住む社会そのものにインパクトを与え、人々の暮らしがたやコミュニティのカタチに何らかの変化をもたらしていると思います。

完全自動運転技術により、極端に言えば、自分の部屋がそのまま移動できる空間になるかもしれません。次の日に東京で仕事があるとする、車の行き先を東京にセットさえすれば、部屋で自由に過ごしながら移動できるようになります。

オンラインでできることが今よりも増え、移動しなければならぬことが限られたとき、暮らし方がかなり変わることが予想されます。

住宅設計も変わってくるし、住む地域に対する考え方にも変化が生まれ、家族というコミュニティや、同じまちに住むということにどういう意味があるのかを問われることになります。

これからの20年間で大きな変化があるとすれば、1回目
が令和2年のコロナ禍、次に自動運転技術だと思えます。



2040

ミライのカタチ 山崎亮

芦屋市市民参画・協働
アドバイザー



テクノロジーがもたらす カンケイ

人口のポリウムとしては、団塊世代と団塊ジュニアが高齢者になる20年間なので、次の20年も高齢社会をどうデザインしていくかが引き続き課題となることは間違いないでしょう。

2020年から2040年の間はテクノロジーとともに、福祉の面は大きく変わっていかねければならないと思います。この期間をスマートに乗り越える施策が出せて、オンラインテクノロジーや自動運転技術が人々の生活に入り込んできたとき、地域コミュニティやみんなで社会を支えあうことが正しかったのかどうか、試される時代になっていく気がしています。

2040年を待たなくてもおぼ

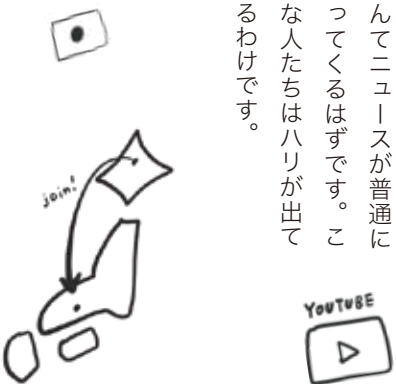
がよくなるようになったけど、これまでではオフラインで集まることの欠点が見えないままやってきたのです。でも、これまでやってきたことの利点と欠点を見えるようにするには、むしろ新しいテクノロジーを意識して開発することが大切です。

コロナ禍で集まれなくなって、オンラインでワークショップをやるようになって大きな変化があったのは、参加者が若い世代になったことです。

今まで、どうやって若い人に参加してもらおうか一生懸命悩んでいました。SNSで呼びかけたり、オシャレなチラシを作ったり。

これまでとは違ったワークショップを始めると、若い人がたくさん集まるような状態が生まれたので、今後はオフラインとオンラインをどう

ちゃんたちがZOOMを使って3時のお茶会をはじめるとか、おじいちゃんYouTubeができて、おばあちゃんフォロワーがたくさんいます、なんてニュースが普通になってくるはずですよ。こんな人たちはハリが出てくるわけです。



家において誰かと簡単につながる事が当たり前になったとき、これまでやってきた地域包括ケアのような高齢社会の対策は、かなり考え直さな

い分けけるかを考える必要があります。

もう一つには、今までワークショップに芦屋市出身の人が東京から新幹線や飛行機を使ってまで来ることはなかったけど、オンラインでワークショップができるようになり、そういった人たちが参加できるようにになったわけです。「芦屋市出身です」「芦屋市にすごく興味があります」「芦屋市の〇〇のお店のパンが好きです」なんて人が遠くから参加するようになるんです。芦屋市との関係人口を集めて話し合うことができるようになったんです。すると「芦屋市のことを芦屋市にいる人だけで話し合えば良かったのか？」という疑問が生まれてきます。オンラインで集まると、芦屋市に愛着を持っている人が全国にどれだけ

新旧の対比で見える価値

オフラインで実際に人と会うことは、表情や空気感、熱量だったり、場の雰囲気や人に与える影響など、膨大な情報量を受け取れるブロードバンドみたいなものです。これはなくなったりしないでしょう。ただ、会わなければならなかった種類のうち、いくつかはオンラインに切り替わると思います。そうすると新たな価値が生まれることとなります。逆に新たな価値との対比により、これまでやってきたことの価値がわかるようになります。

今まで、人が集まるワークショップを僕らもやってきたし、これからもやると思います。ただ、コロナの間に、ワークショップをZOOMと

かで見えてくるはずですよ。オンラインとオフラインの利点と欠点

いるかわかるんです。その人たちが芦屋市にポジティブな意見を言ったとき、住んでいる人の気持ちやポジティブになったり、このような価値がどういったことなのか分かってきたとき、かつてのワークショップでできていなかったことがとてもよく見えてくるはずですよ。我々が2040年までに、話し合って市民主体のまちづくりを進めるときに、どちらのツールを使うべきかが見えてくるのです。





山崎 亮 (やまざき りょう)

芦屋市市民参画・協働アドバイザー。studio-L 代表。コミュニティデザイナー。社会福祉士。

大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士(工学)。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年に studio-L を設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。

ミライに向けてイマ できること

これまでは経済的な面の価値観が重視されてきました。だから「GDPを上げなければ」とか「人口を増やさなければ」ということに翻弄されて1週間のうちに5日間も働くという社会を生きているわけですね。

だけど、その価値を根底から揺るがすようなテクノロジや社会がやってきたとき、我々が幸せに暮らしているかと思うたら、いったい何に重心を置くのか、僕らは人生において何を大切にしなければならぬのか、教育の中でも明示されています。

今はサービスを買って楽しむとか、お金を出して楽になるとか、そのた

めに一生懸命働いて、お金を貯めるという仕組みで経済や税収が回っているけど、そこから脱落するような事態が起きてくるでしょう。

かつての意味のない煌びやかさはどんどん剥げ落ちて、無駄なものも削ぎ落とされていく20年になる気がします。だけど、それでいいと思います。

経済をうまく縮小させて、心を含めてどう豊かに生きていくのか、本当の豊かさとは何かということを理解して、自分自身で楽しいことを生み出すことができるかどうかが問われることとなります。その意味で教育は変わらなければいけないと思います。



受験で覚えることは全部デバイスに入っている、だからもつとクリエイティブなことに頭を使おうと、当然そうやってくるでしょう。人間が頭を使ってやるものが変わっていくときに、本当の豊かさが何かというところが、ちゃんとみんなにインストールされていれば、社会が成立すると思いません。

自分と家族と周囲の人たちが楽しいと思うような、そんな圏域を作っていくだけのお金を見据えたら、あとはお金を使って誰かに楽しませてもらうことをやめるマインドさえあれば、買わなくても楽しいというマインド、気持ちを手に入れることができます。楽しさを自給できる能力、自給力を高めることです。

世界における日本の存在感を増すために、僕らは一生を捧げているわけではないはず。僕らは一生が楽しくて幸せになるために生きているわけだから。



取材場所提供

Y's café

〒659-0087
兵庫県芦屋市三条町 33-8



芦屋市出身で、国連本部でもスピーチを行うなど、SDGsの第一線でご活躍されている川廷昌弘さん。コロナウイルス感染症をはじめとする地球規模での環境変化や社会問題が起きている中、持続可能な社会の構築や、未来のヒントとなる考え方についてお話をいただきました。

SDGsはミライをつくる道具

SDGsは、国連において1972年から地球の未来に関して「環境保全」「社会開発」「防災減災」「ビジネス」「教育」などの観点から持続可能な人間社会について議論され、2015年の国連サミットで全人類の目標として採択されたものです。しかし、これは単に勉強して知識をつけたり、暗記したりするだけでいいものではないと思っています。SDGsのロゴであるカラーホイールや、17の目標のカラフルなアイコンは分かりやすいコミュニケーション・ツールとなっていて、「みんなで未来をつくっていくんだ」という一人ひとりの主体性をつなぎ合わせる事が期待されている内容になっています。

「私は芦屋に住みながら何ができるか」「私は芦屋の子どもの未来のために何ができるか」ということを考えることが大切で、そういう意味でSDGsは一人ひとりにとっての未来への羅針盤であり未来をつくる道具だと言えると思っています。

過去から学んで考えるミライ

芦屋市には、全国で唯一の芦屋市にだけ適用される「芦屋国際文化住宅都市建設法」がありますが、この法律を作った過去の先人たちの考え方が、これからの未来を考える際にとっても参考になると思います。

当初、この法律を作るにあたって「観光」の要素を取り入れようという考えもあつたようですが、先人たちは議論の中で、「観光」の文言を除き

SDGs みんなでつくる ASHIYA のミライ

博報堂DYホールディングスグループ
広報・IR室CSRグループ推進担当部長
川廷昌弘



SDGs: Sustainable Development Goals の略。2015年9月の国連サミットで採択された持続可能な開発目標として、2030年までに目指す17の目標と169のターゲットが定められています。

ました。これは、当時、芦屋のまちが持つ資源に観光の要素がないことを認識した上で、資源としてないものを無理に他から持ってきたりして取り入れようとはせず、温暖な気候や、大阪や神戸との位置関係や、身近な自然など、芦屋に元来ある資源や、住まう人も国籍を問わず外国人の定住まで考えた住み続けられるまちづくりを行っていくという発想でした。いつの時代でも色褪せることのない住宅都市のあるべき姿を目指した法律で、まさに今こそ必要なサステナブルな考え方のもとでつくられたものだったと感じます。

さらにすごいなと思うのは、法律制定のため市民参画型で住民投票を行ったことです。このような考えやプロセスはSDGsの理念と一致するところが大いにあると感じます。昔は良かったという話をしているわ

けではなく、終戦直後に志高く未来を考えた人が芦屋には存在したことがすごいと思いますし誇らしいと思います。これからの芦屋のためにルールづくりやまちづくりをしていくために、このような過去であれば学ぶことはきつと多いでしょう。自分たちの生き方のヒントにもなるのではないのでしょうか。

また、芦屋は日本初の女性市長が誕生したまちでもあります。女性活躍の一つの功績をつくった訳ですが、そんなまちだからこそ単に女性の登用率を上げるだけではなくSDGsの大切な考え方である、誰一人取り残さない、まちに向けた制度や仕組みを率先してつくっていくことが大切ですね。そういった取組を大いに期待したいし、できることならお手伝いしたいと思います。

なって、緑豊かな家やマンション、そして街路樹などを植えたり守ったりするから芦屋の景観が成り立っている訳ですよ。つまり市民一人ひとりがまちづくりに参加している。市役所任せ、誰か任せではなく、住民が主体となるような風通しの良さを市役所と一緒に構築するなど、それぞれの役割分担を理解し合うことによって、人の表情もまちの表情ももつと豊かになっていくと思っています。SDGsを推進する国連はそういった方法を作りだすことを期待しています。

2040年に向けて 共有する材料

僕は市制50周年を記念して刊行された写真集を今も持っています。ときどき眺めては少年時代の芦屋から安らぎを感じることが出来ます。こ

の写真集は、過去を振り返り未来を展望する大切な材料だと思っています。80周年の節目でも、このような芦屋の本質について考えてもらえるような材料を作り市民と共有することが大切だと思います。これまでは高度経済成長の勢いで芦屋も開発されていきました。これからは、芦屋文化が花開き芦屋市が誕生した80年前の魅力を、2020年6月号の「広報あしや」でモノクロの写真カラー写真で伝えたいように、芦屋の本質を身近に実感できる方法を考え、他の地域では得られない芦屋ならではの暮らしというゴールを、市民と市役所が役割分担をして一緒に作り出していく。そんな信頼関係を資本に成長できるような材料を提供することが、これからのSDGs時代らしい発展を創り出す原動力になるように思います。そして芦屋市が

みんなが主役のまちづくり

2020年は新型コロナウイルスの影響でリモートワークなどができる環境整備がとて進みました。これからの働き方は大きく変わるでしょう。何より自分たちが住む地域との繋がりを強く意識することになったと思います。そして芦屋にいても東京の仕事ができるかもしれない。選択肢はとて広がっていると思います。このような時代の中で、子育てする世代が芦屋に住んで子どもを育てたいと思えるようなまちをつくるには、住民がまちづくりに参画し、魅力を高めることも欠かせないと思います。

先人たちが法律まで作って努力してくれた芦屋の景観だってそうですよね。誰かが景観を作ってくれている訳ではない。市役所と市民と一緒に

100周年を迎えるころ、80周年のときにもらった材料から得た発想で、「自分も主体的に動くことができてこんなことやあんなことができた。今もこんな想いを大切に持っている。」など自分ごととして、今、芦屋で学んでいる子ども達が喜べるような100周年、2040年になっているといいですね。そのためには今の大人たちが準備をしなければならいのですよね。それが今回の市制80周年に発信すべき材料ではないかと思えます。このようにあるべきゴールから発想するバックキャストینگで物事を考えるためには、良質なインプットがなければ良質なアウトプットができません。良質なインプットをすることが2040年に向けて重要ですね。



川廷 昌弘 (かわてい まさひろ)

芦屋市生まれ。博報堂 DY ホールディングスグループ広報・IR 室 CSR グループ推進担当部長として SDGs を推進。神奈川県顧問 (SDGs 推進担当)、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン (GCNJ) の SDGs タスクフォース・リーダーなど委嘱多数。著書「ミライをつくる道具わたしたちのSDGs」(ナツメ社)から出版。公益社団法人日本写真家協会会員の写真家としても活動し写真集「一年後の桜」(蒼穹舎)「芦屋桜」(ブックエンド)など出版。

芦屋を語る事が楽しい

僕の肌に染み込んだ芦屋は、何でもあれるけど何も無い。山も川も海もある。でもダイナミックな山はないし、美しい海や常に水が流れる大河もない。自然を満喫できるかという適切な言い方ではないかもしれませんが、箱庭的な感じですよ。ただ中学生のときの経験ですが、友達だけで芦屋の山でキャンプをしたことがあります。映画「スタンド・バイ・ミー」のようなことができるんですよ。家から歩いて1時間ぐらいのところ、明日の朝ごはんのウインナーが腐らないように川の水で冷やしてテントで寝て朝起きてみたら、野良犬に食べられて袋だけが川に浮かんでいた光景を見て笑いながら夕方暮れてしまいました。ささやか

な自然の中での学びですよ。でもワイルドな自然はそこにはない。けれど日常では得られない学びがあった。やはり友達と芦屋の浜で釣りをしたり、一通りの経験はできたように思います。芦屋川は大雨が降ると水かさが増して、晴天が続くと干上がりやすよね。すると、国道43号の下にあるコンクリートの段差で大量のオイカワが死んでいました。子どもの頃にそういうことを見て、自然のはかなさや死に対する切なさ、何とも言えない気持ちを日常で感じました。いまならイノシシも気になりますね。芦屋らしい自然界と都市生活の同居の中で、子どもごころに刻むものがあり、それが僕の場合は人間形成に大きく影響していたんだろかなあと思います。

芦屋にゆかりのある芸術家が多いのも芦屋の魅力ですよ。世界的な名

声を得た画家の吉原治良さんは、企業経営者として日常を過ごしながら芦屋で美術活動をされてきました。彼の元が集まった芸術家たちが芦屋の空気感のなかで育んだGUTAI美術は世界に強くアピールすることができました。写真家のハナヤ勘兵衛さんや中山若太さんを中心に活動した芦屋カメラクラブも、日本でも先鋭的な表現者の集団として成長し、その頃の世界の最先端の表現と言われていたドイツの新興写真に對抗する気概がありました。このように、先入観にとらわれない新しい自己表現に伸びやかに挑戦していたことを思うと、芦屋に暮らす人々の営みがまちの空気感を作るわけですから、どんな芦屋だったのだろうと、その頃にタイムスリップしてみたいと思いますよね。このように僕は、今は芦屋から離れて暮らしているが

ら余計に「故郷の芦屋を語れるのが幸せ」だと実感しますが、こういうことがとても大事だと思っております。SDGsは何か大きなことをやるうと言っているのではなく、誰一人取り残さず、多様性を認め合い、一人ひとりが自分の持っている力を発揮して、自分のまちで幸せに暮らすことが本当の目的なのです。芦屋はいつの時代でも、住んでいる一人ひとりとってワクワクするまちであってほしいと思います。やはり僕は、芦屋を語ることがとっても好きだし楽しいし、幸せだなあと感じます。



ミライの芦屋を
聞いてきました



ドイツのベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団で第1コンサートマスターを務める、バイオリニストの日下紗矢子さん。そんな日下さんが、今はじめた芦屋市からクラシック音楽の輪を世界へ発信する活動についてお話をいただきました。

ミライに繋がる音楽活動

ドイツで第1コンサートマスターとして働き始めて12年が経ちました。3歳半からバイオリンを習いはじめ「バイオリンがうまくなりたい」その一心で走り続けた日々でした。今まで本当にたくさんの人たちに助けていただいたことや、音楽を通してできた素敵な出会いに感謝するとともに、音楽家として経験してきた大切なことを次の世代に伝えていきたいと思うようになりました。これからは「バイオリンの奏者としてだけではなく、未来に繋がるような音楽活動ができたら素敵だろうなって」そう考えた時に、自分のプロデューサーする音楽祭を私にゆかりのある大好きな土地で開催することができなにか考えるようになりました。学生の頃から国内外の音楽祭に参加

クラシック音楽の輪を 芦屋から世界へ

バイオリニスト

日下紗矢子

する中で特に心に残っているのが、中学生の時に参加した群馬県の草津国際音楽祭でした。この音楽祭では、町の皆さんがボランティアで音楽祭の運営に参加され、音楽家の皆さんとすごく仲良く交流し、町全体で音楽祭を盛り上げている感じが伝わってきました。会場の雰囲気がとても暖かく感じられて「こんな音楽祭って素晴らしい。私もいつかこういう音楽祭をプロデュースしてみたい」と中学生ながらに思いました。

地域密着型の音楽祭

「音楽祭をゆかりのある大好きな土地で開催したい」そう考えたときに、すぐ頭に浮かんだのが芦屋でした。私が小学生から中学生まで過ごした、ちょっと甘酸っぱいような思い出が残っている街。山と海、そしてその二つをつなぐ川が流れる風景が



日下 紗矢子 (くさか さやこ)

東京藝術大学を首席で卒業。米・南メソジスト大学大学院・アーティストコースを卒業。ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団第1コンサートマスター。読売日本交響楽団特別ゲストコンサートマスター。日独両オーケストラのコンサートマスターを兼務しながら、ソロなどの活発な活動も展開。

とても魅力的です。この芦屋で自分の音楽祭をプロデュースしたいと思いました。

全国的に見ても裕福な街のイメージがある芦屋ですが、音楽的な行事は他市と比べて数多く行われているわけではありません。私が住んでいた時もクラシックコンサートを市内で聴ける機会は少なく、いつも母に連れられて大阪や京都まで行っていました。今は隣の西宮市の兵庫県立芸術文化センターでクラシックコンサートが盛んに行われていますが、私手がけようと考えている「芦屋国際音楽祭」ではコンサートホールで開催されるものとは少し雰囲気の違い、手作り感満載の音楽祭にしていただろうと思っています。できる限り芦屋の皆さんにご協力をお願いして、運営から開催までいっしょに参加していただき、地域の皆さんを巻

き込んだ地域密着型の音楽祭を作り上げる。そうすることで、単なる奏者と聴衆の枠を超えた深い繋がりが生まれ、皆さんに愛される音楽祭になつていくと思います。

子どもたちにクラシック音楽を

音楽祭では、子どものためのコンサートも開催したいです。今は、日本だけでなくヨーロッパでもクラシック音楽を聴く人の年齢層が高くなっています。どうやって子どもたちにクラシック音楽に興味をもってもらうか、大きな課題です。クラシック音楽を子どもたちに聴いてもらいたいでもらうには、気軽に子どもたちが聴ける機会を作ることが大切だと思います。

この音楽祭を聴いたことがきっかけで、まったくクラシック音楽に興味

をもっていなかった子が「こんなふうに弾いてみたい」とか「この曲が好きだな」と思うことで楽器を習いはじめたり、音楽家への道を目指すきっかけになったり、クラシック音楽が好きになったり、そんな風にも子どもたちの将来の選択肢が広がる場所を作りたいと思っています。

芦屋国際音楽祭の開催

2020年4月に第1回芦屋国際音楽祭の開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により残念ながら中止になりました。今は来年の開催に向けて準備しています。音楽祭は、芦屋カトリック教会をメインの会場にして、肩肘を張って聴くような感覚ではなく、リラックスした心地よい感覚で皆さまに演奏を楽しんでもらいたいと思っています。特にお子さんがい

らっしゃるご家族や、クラシックコンサートを一度も聴いたことがない方達にも、日本そしてヨーロッパの第一線で活躍する音楽家の演奏をぜひ聴いていただきたいです。

今は、インターネットで簡単に音楽を聴ける便利な時代ですが、生で音楽を聴いた時の感動や高揚感は、生きていることの喜びをもたらしてくれません。毎年、開催回数を重ねていくことで、数年後には市内のいるいるな場所を音楽祭の会場に広げ、よりたくさんの方の音楽家、聴衆、芦屋の皆さんがこの音楽祭に参加していただけるように発展させていきたいです。音楽を通じて世代を超えた交流の場を作り、芦屋、そして音楽界の未来に繋げていきたいと思っています。そして10年後・20年後には芦屋から世界へクラシック音楽を発信していけたらと夢を見たいです。

ミライの芦屋を
聞いてきました



FUTURE



NOW



PAST

芦屋市制施行80周年記念事業協議会の実行委員会であるASHIYA想創課のサポーター寺田 雄人さん、課長の古賀 美紅さん、秋田 琉成さんにこれからの未来や芦屋について聞いてみました。

デジタル化で見える人の温かさ

市Q) 人口減少やAI等の台頭によって、時代の変化がとても速く、未来の予測が難しくなっていると感じますが、皆さんからはこの先の社会がどのように見えていますか？
寺田) これから先の社会は、AIが人に代わり多くのことをこなし、一部の人を除いて大半の人が働かなくていいような時代が来ると思っています。

秋田) ライフスタイルの中で多くのことがデジタル化され、家から出なくても完結できるようになるでしょうね。だからこそ、人と人が直接会うときのあたたかさを大切にしたい。直接人に会えないのはやっぱり寂しいから。

古賀) 私は、今までの人生で、多く

つながりたい
大切なコト

ASHIYA想創課

秋田 琉成
寺田 雄人
古賀 美紅

の方からたくさんのお恩をいただいたと感じていて、それを返していきたい。人と人のつながりを大切にしながら、感謝したり・されたりする関係を大切にしたいです。

寺田) モノを持つたり、経済的に豊かになることより他人や社会とつながることに価値を見出している人が増えているよね。精神的な豊かさを大切にしたい。「つながり」がとても大事だと感じています。





ASHIYA 想創課 (あしやそうそうか)

芦屋市制施行 80 周年記念事業のコンセプト「これまでの芦屋と今の ASHIYA を未来につなぐ」を実現するため、「未来につながる関係性の構築」を目的に市内在住・在学高校生を中心に総勢 24 名で結成されたプロジェクトチームです。「想い」という言葉には、自らの「想い」(人間性)を大事にしつつも、相手の「想い」を尊重し、「創る」という言葉には、楽しみながら新たなことに挑戦するという意味が込められています。

ミライにおける 自分の役割

市Q) みなさんが「つながり」を大切している中で、社会に対し、将来自分は何のような役割を担っていきたいと思いますか？

古賀) 養護教諭。自分がお世話になった先生から得たものをつなぎたくて。しんどさを感じている子に寄り添えるようになります。

秋田) 学生が持つアイデアを生かすことができるような起業がしたいと思っています。ベンチャーキャピタルみたいな。理想を現実にするような人とのつながりをつくり、型にはまらないアイデアを企業や社会に出したいです。

寺田) 10 年後の未来が見えているわけではないけど、やりたいことが2つあって、ひとつは地域貢献。もうひとつは若い人たちに何かを伝えて

いきたい。その先に、関わったメンバーで芦屋のために一緒に何かができたらいいなあ。大金でなくともお金を稼ぐことができて、そこにちゃんと価値がある活動をしていきたい。



芦屋の存在・残したい価値

市Q) 皆さんが大切にしている価値観の背景にある「芦屋のまち」とは、皆さんにとってどのような存在ですか？未来に残したいものは？

古賀) 芦屋は高校生が活躍できる場が多くあるので、それを残してほしい。

と思います。

秋田) 自分にとって、一番落ち着く場所。住宅と緑と川で成り立っている、その魅力だけで十分なのは芦屋だけだと思います。梅田と芦屋なら芦屋を選びます。芦屋川の土手に座り友達とおしゃべりをする時間に大きな意味があると感じています。

寺田) 芦屋市民であることが、豊かな人間性を形成するための「旗」や「錨」みたいな感じかな。人生の山を登る上での目標であり、変な道にそれそうになったときに「芦屋市民だから」と、姿勢を正してくれるような錨だと思う。芦屋の価値として残してほしいのは「芦屋の人たちの人間性」なんじゃないかな。

市Q) 芦屋のまちで変えたいところはありますか？

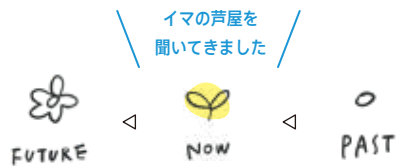
秋田) 今を変えたくないかな。良い環境を残してほしい。

古賀) 変えたいところは思いつかないなあ。今の芦屋が好きです。このまま、のどかな芦屋のままいてほしい。

寺田) 経済的な豊かさも大事ですけど、精神的な充足をもっと増やしていきたい。例えば、音楽のイベントだったり、市民が作った芸術系のアートだったり。そういった世界観が増えたらいいな。

山・川・海の自然がすぐそばにあつて、オシャレな建物も多いから視覚的に豊かだし、道行く人たちの気品が精神的なゆとりをもたらしているのでしょうかね…。それにしても、高校生がここまで芦屋で流れる時間を愛していることに僕も驚きました。





令和元年(2019年)6月より第2代芦屋市長となつたいとうまい市長。

市議会議員を経て市長となった経験の中で、政治家としての考えや、一芦屋市民としての考えを語ってもらいました。

自然に受け継いだバトン

政治家を志したきっかけをよく聞かれるのですが、実は「これ」といったきっかけや動機がある訳ではないんです。

母が芦屋市議会議員として政治家になつた頃、当時は「男女雇用機会均等法」ができ、日本社会党で土井たか子さんが党首になられたのも同じくらいの時期です。女性活躍の素地ができつつあつた時代で、今と比べて女性が政治家になることはとても大変だつたと思います。

そんな時代に政治家を経験した母が、引退すると決めたとき、「自分のあとは女性に引き継ぎたい」という強い想いがあつたようです。

母はいろいろな方にお声がけをしていますが、最終的に白羽の矢がたつたのが私です。

姉が2人いますが、すでに別の職についていたのと、私が母の政治活動の手助けをしていたことなどから声をかけられたのです。

「特別じゃない」 感覚を大切に

政治家になつたからには母とは違う方法で市議会議員としての道に挑戦したいと思い、議員として最初は大きな会派で学び二期目は自分たちの会派をつくりました。

議員時代は、自らが関わって提案した政策が実現した時はすごく面白いし、皆さんから「ありがとう」と言われることは今でもモチベーションにつながっています。

いつも「笑う門には福来る」の想いで、気持ちの良い挨拶をするように心がけています。政治家になって精

Natural に今と向き合う

第2代 芦屋市長

いとう まい





いとう まい

1969年9月18日大阪府生まれ。1992年帝国女子大学（現：大阪国際女子大学）、2004年Hawaii University Maui分校卒業。2014年神戸大学大学院法学研究科前期課程修了。

東京海上火災保険株式会社代理店勤務等を経て、2007年芦屋市議に初当選。以降2019年まで3期にわたり芦屋市議を務める。2019年6月より現職。

神面で鍛えられたところはあると思いますが、時々、クヨクヨしたり、落ち込んだりもします。驚かれるかもしれませんが、嫌なことがあると、ぬいぐるみに話しかけながら気分転換をしています。（笑）

また、先々代の市長である北村春江市長も女性ですが、彼女は弁護士でもあり、高い能力をお持ちでした。私は彼女のような能力や地位がある訳ではありませんが、そんな自分みたいない人間でも政治の場でものを言えることが大切なんじゃないかなって思っています。自分たちの生活感覚を伝えられることが大事だと考えていますし、女性が政策決定の場にいることも必要だと感じています。

芦屋市長になって思うこと

月並みな言葉になりますが、芦屋のまちには自然があり、お洒落な街並みと便利さがとても良いところだと思っています。また、魅力を高めている要素として、このまちに住む人の存在が欠かせないと感じています。「芦屋ブランド」というのは、こういった複合的な要素が重なって魅力形づくっているんだと思います。この良さを次の世代まで残したい。

全国的な人口減少の中、自治体間での子どもや人の取り合いの中で、選ばれるまちになりたいというよりは、質の高いまちづくりを行うことで芦屋のまちの魅力を高めたいと考えています。

先代の山中市長の時代は、阪神・淡

路大震災による借金を返済しつつ市政運営をしなければならなかった時期でした。これからの時代は将来を見据えた持続可能な行政運営をしていかなければなりません。それが私の役目なのかと感じています。

市長や政治家になっていなければ、人と接する仕事をしていたと思います。将来の自分がどうなっているかは、ハッキリとした目標がある訳ではないけれど、子ども食堂のような子どもや困っているお母さんに関わりたいとも思っています。



次世代の人たちへ

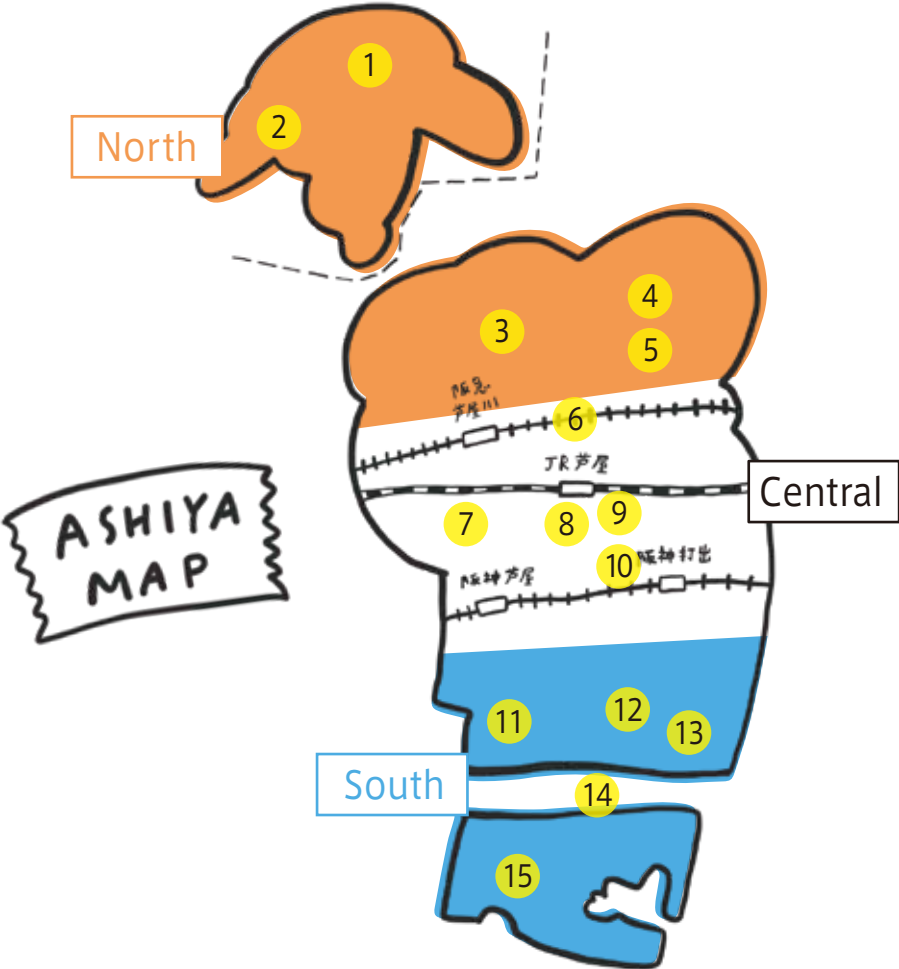
今年には新型コロナウイルスの件もありましたので、政治が身近に感じた年になったのではないのでしょうか。そういったご自身の身近なところに対して、感じているところから、まちづくりに興味を持ってもらえたらうれしいです。

FIGHT!





山・川・海・住宅と多彩な表情をもっている芦屋。カメラでその表情のイマを切りとってきました。あなたも芦屋のお気に入り写真をSNSにハッシュタグ#ashiya80で投稿しませんか。



1

奥池

木々に囲まれた美しい水辺の景色が広がる奥池南町にある奥池。初夏の昼下がりには、鮮明に映る水面が爽快です。



3

山手緑地

元邸宅の庭園を公園として生かした山手緑地。秋には何層にも重なったモミジが赤く染まります。モミジが夕日に照らされた時、より一層赤く輝き、その美しさを増します。



2

東おたふく山登山口

東おたふく山登山口バス停（阪急）から登山道を1時間ほど歩くと東おたふく山の山頂に到着。一時は無くなりかけたスキの草原が、いまは戻りつつあります。



4

岩ヶ平公園

岩ヶ平公園を埋め尽くす満開の桜は、毎年、見る人の心を奪います。晴れた日の朝に見る、空の青とのコントラストがとても綺麗です。



5

仲ノ池緑地

住宅街のなかで水生の動植物や野鳥・昆虫など豊かな生態系を観ることができる仲ノ池緑地。水面に映る空と木々が、シンメトリーの景色を映し出します。





11



芦屋公園

数百本のクロマツが立ち並ぶ芦屋公園。公園内から上空へカメラを向けると、空に向かって伸びる生命力に溢れたクロマツを撮ることができます。

12



宮川

汐風橋からキャナルパークまで続く宮川沿いの桜並木は、芦屋の桜スポットのひとつ。満開の桜が宮川を飾るとき、春の訪れを感じます。

13



メガストラクチャー

メガストラクチャーと呼ばれる特徴的な工法によって建てられた高浜町の高層住宅。空が赤く染める冬の夕暮れに、海面に映し出される建物の陰影は幻想的です。

14



キャナルパーク

芦屋川と宮川が流れ込むキャナルパーク。冬には運河のような海面越しに綺麗な夕日が沈みます。

15



総合公園

四季折々の風景が楽しめる総合公園。イチョウの葉が黄色くなる秋も、オススメのスポットです。



6



山手幹線

JR 芦屋駅の北側に建つラポルテに挟まれた山手幹線。空気が透き通る冬の夕暮れには、建物の中から覗くマジックアワーの空がひとときわ際立ちます。

8



茶屋之町

茶屋之町を南北に通る駅前線。お洒落なカフェやかわいい店舗が立ち並ぶ街並みは、写真映えること間違いなし。桜の季節は特に綺麗です。

7



芦屋川

芦屋川に架かる大正橋から海側を覗いた景色。ルナ・ホール（左）と芦屋仏教会館（右）に挟まれた芦屋川から小さく見える街並みと空の広さは、季節を問わず最高のロケーションです。

9



旧宮塚町住宅

日華石で造られた旧宮塚町住宅。昭和 28 年に建設された市営住宅をリノベーションした建物は、レトロ感が満載でお洒落なお店が並びます。

10



鳴尾御影線

約 1.2km にわたってケヤキの木が並ぶ鳴尾御影線。木漏れ日がアスファルトを照らす新緑の季節には、緑のトンネルが続きます。

まちを彩る 芦屋ヒストリー

芦屋には、旧石器時代から約2万年間、人々が紡いできた歴史があります。まちを彩る芦屋の物語を、ほんの少し紐解いてみましょう。



『伊勢物語』から紐解く芦屋

芦屋のまちが纏う文化の香り

芦屋のまちが纏う特有の雰囲気について考えてみたことはありませんか？どこからきているのか？その答えの一つは、山・川・海の豊かな自然環境に恵まれた立地であることに加え、これまでに培ってきた歴史や文化の香りをまちのいたるところで感じられることです。洋画家の小出檜重や文豪谷崎潤一郎をはじめ、多くの芸術家・文化人が居を構え、優れた文化が育まれた背景には、芦屋のまちが持つ歴史や文化が多くの人々の心を魅了し、そこに住む人々へ文化的なインスピレーションを与えた結果だと言えるでしょう。

芦屋の文化と『伊勢物語』

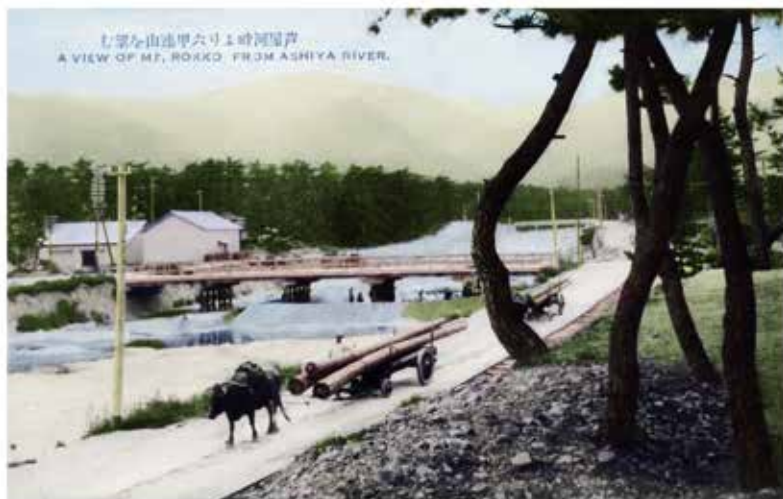
芦屋の文化が醸成されるきっかけとなった要因の一つを見てみると、そこには平安時

代の超ロングセラーとして今も語りつがれる『伊勢物語』が大きく関係していることに気づきます。平安時代、今から1000年以上前につくられた作者不詳の『伊勢物語』。恋愛ストーリーを軸としたフィクションであり、作中に確かな名前はでてきませんが、在原業平が主人公と考えられています。

多くの謎に包まれた『伊勢物語』ですが、物語を構成する125話のひとつ、第87段には在原業平の芦屋の別荘でのエピソードが描かれています。このストーリーにより、平安朝以降、芦屋の地は在原業平ゆかりの歌名所として有名になりました。そして、芦屋には業平に関係する伝説と地名が生まれ、豊かな文化が醸成することとなったのです。

過去の芦屋を
紹介します





1917年（大正6年）に架けられた木造の業平橋
1924～1925年（大正13～14年）撮影の写真をカラー化



『伊勢物語』第87段 芦屋の灘の漁火
「伊勢物語画帖」画：狩野探雪（芦屋市立美術博物館蔵）



在原業平（825 - 880年）
「若鶴百人一首」（芦屋市立美術博物館蔵）

在原業平は平城天皇の孫であり、家柄は大変良く、容姿も美男子であったと言われ、伊勢物語』では数多くの女性と関係したモテぶりが描かれ、ときには、結ばれることが許されない立場の女性と禁断の恋におちてしまうなど、大胆な行動をとる一面を持ち合わせています。一方で歌の才能は、六歌仙・三十六歌仙として平安時代を代表する歌人として大変優れているのですから、さながら平安時代のアイドルと言える人物です。

今に残る業平にゆかりある伝説

芦屋市には、「業平町」という在原業平の名がつけられたまちがあります。業平町の名称は、大正時代に架けられた「業平橋」に由来し、1944年（昭和19年）の町名改正で誕生しました。

また、芦屋市には業平の父親である阿保親王のお墓だと言われている阿保親王のお墓ではありません。阿保親王塚古墳の出土品から、阿保親王の没年より約500年も古い4世紀代（古墳時代前期）に造られた古墳であることが明らかとなっています。

この他にも、市内には阿保親王の住地に建立されたと伝えられる親王寺が打出町にあるなど、業平の父、阿保親王にゆかりある伝説も残っています。

平安のアイドル在原業平

在原業平ゆかりの地、芦屋

現在でも、ヒット作となる映画やアニメ、ドラマ等に関連する場所などを「聖地巡礼」と称して、多くのファンが訪れ、それによりまちが活性化することが各地で起きています。人々の心を惹きつける要素として、物語と現実世界との接点に興味を湧くように、芦屋においては『伊勢物語』という現存する最古の歌物語をもとに1000年を超える壮大な時間をかけて、まちのいたるところで業平のみやびを感じられる魅力が生まれ、平安時代から現在に至るまでイメージされてきた芦屋と業平の関係は、長い時間をかけて芦屋の文化を豊かにしてきました。また、培ってきた歴史は、芦屋の人々の心の奥底に通じる何かを生み出す影響力の源としていまだ、色褪せることなく存在し続けています。そして、芦屋と業平のストーリーをはじめ、地域の歴史や伝説、そして文化や景観を未来に継承していくことによって、過去、現在、そして未来を生きる人々は、時空を超えてつながることができるのです。



花崗岩から紐解く芦屋

芦屋のまちが纏う色

芦屋の「まちの色」について、考えてみたことがありますか？人それぞれにパーソナルカラーがあるように、まちにも固有の「色」があります。まちの色と言えば、ヨーロッパや世界各国の美しい都市の街並みに代表されるように、まちの魅力や個性を左右する大きな要因の一つです。そして、そこに住む人々の生活や文化に影響を与え、まちの個性を生み出しています。

では、芦屋のまちが纏う色はどこからきているのでしょうか。その答えの一つが、芦屋のまちの土台となる六甲山地の地質にあります。

花崗岩が生んだ景色

六甲山地は、1000万年前の「六甲変動」と呼ばれる地殻変動で陸地の隆起と大阪湾の沈下によってできました。六甲山地のほとんどは花崗岩でできており、芦屋のほとんどはこの花崗岩が由来でできています。

六甲山地で産出する花崗岩は、含まれる主要な鉱物が白く

桜色のため、石全体が柔らかな桜色をしています。この優しい色合いが風景に溶け込み、芦屋のまちなみを暖かく彩っているのです。建物や塀など、景観の調和を目指す現在の制度においても、使用可能な色を明るめで優しい色としているのは、まちの色に花崗岩の色が大きく影響しているからと言えます。



花崗岩の石垣
国重文 ヨドコウ迎賓館

作った石臼を使用した水車で灘五郷の酒造りの精米などが行われていました。

また花崗岩は、硬度が高く耐久性に優れている特徴から、明治・大正時代以降、郊外住宅地となった芦屋市域では、まちづくりに地元の花崗岩がたくさん使用されました。今でもまちを歩くと、石垣をはじめ、いたるところに地元の花崗岩が使われていることに気づきます。

花崗岩は、風化が進むと「真砂」と呼ばれる砂になります。真砂は白く、芦屋の浜辺の松と合わせて「白砂青松」と言われ、画家の小出檜重の絵や、谷崎潤一郎・与謝野晶子などの文学作品にも描かれ、芦屋を象徴する美しい風景として多くの人々を魅了しました。

私たちが普段、何気なく見ている芦屋のまちなみは、花崗岩とまちの深い関係により築き上げられたものなのです。

明日からは、芦屋のまちにある花崗岩を改めてじっくり見てください。何か新しい発見があるかもしれません。

暮らした根付く花崗岩

花崗岩は、芦屋のまちの色だけでなく、文化や生活にも大きく影響を与えています。



白砂の美しい芦屋の浜辺
大正時代の絵葉書をカラー化

芦屋川沿いには「水車谷」の地名が残っています。山と海の距離が近く急流だった川の流れを利用して、花崗岩で

